

モデル事業名	四万十川・RIVER会員制度を活かした地域資源活用プロジェクト
活動団体名	株式会社 四万十ドラマ
ホームページ	http://www.shimanto-drama.jp/
所属/ 担当者名	佐々倉 玲於
連絡先	0880-28-5527、 leosasakura@gmail.com
活動地域	しまんとがわちゅうりゅういき とおわ たいしょうちく げん しまんとちよう にしとさちく げん しまんとし 四万十川中流域（十和・大正地区（現・四万十町）、西土佐地区（現・四万十市））

● 活動地域の概要

当該地域は、四国・高知県の四万十川中流域に位置し、合併以前は、十和村・大正町・西土佐村と隣接した市町村であり、それぞれの地域住民が連携し合い、地場産品の商品開発などを行ってきた。（当社は、これらの地域の住民が出資し、第3セクターからスタートし、現在完全民営化し、自立的に運営を行っている住民株式会社である。）現在では、市町村合併が行われ、十和村（人口 3315 人・世帯数 1262）・大正町（人口 3124 人・世帯数 1204）は、近隣の窪川町（人口 14021 人・世帯数 5766）（平成 18 年現在）と平成 18 年 3 月に合併し四万十町（人口 20264 人・世帯数 8822 世帯）（平成 21 年現在）となり、西土佐村（人口 3668 人・世帯数 1436 人）は近隣の中村市（人口 34115 人・世帯数 14523）（平成 18 年現在）と平成 17 年 4 月に合併し四万十市（人口 37917 人・世帯数 15360）（平成 17 年現在）となっている。

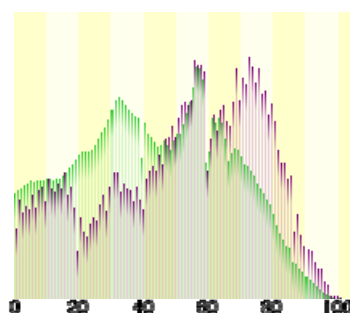
四万十町は、町域は東西 43.7km、南北 26.5km、総面積 642.06km² あり、そのうち林野が 87.1%を占め、田畑は 4.8%を占めるに過ぎない。集落の多くは四万十川とその支流の河川沿いや台地上にあり、一部は土佐湾に面する海岸部がある。高齢化率は約 35%で、下グラフの通り、20代～40代の若者・子育て世代は全国平均に比べ倍近く少なく、都市部や県外へ流出していることが伺える。



▲位置図



▲地域の様子



←四万十町と全国の年齢別人口分布図（比較）紫：四万十町、緑：全国（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

活動地域の課題

このような山間の過疎集落であり、集落間の距離も離れていることから、人と人とのコミュニケーションをとる機会が減っている。そして、地域内の人口は減少し、暮らす人々自身も年を取っていく中で、心理的孤独感や閉塞感と、将来、集落がなくなるかもしれないという不安感、危機感を持ちながら生活をしているという現状がある。

しかし一方で、当社に関わる株主・生産者のように意欲的な地域住民は存在しており可能性がある。これら意欲的で元気な人々の取り組みや存在を情報発信し伝え、地域内のコミュニケーションを増やし、地域内の人々を刺激し、「不安感」を「安心感」に変え、地域全体で様々な地域づくり活動を行っていきけるような気運を高めていく必要がある。

地域内で生産される農産物については、商品開発されているが、交通の不便さのハンデもあり、販路開拓・拡大を行っていく必要がある。そのためには、地域外とのコミュニケーションの機会も増やし、信頼関係をつくっていく必要がある。

● 活動の内容

（全体）平成 21 年度

活動①：コミュニケーション手法開発に向けた社会実験

どのような地域情報を地域内の人々に届ける必要があるのか、また、地域外の人々にどのような地域情報を届けたら地域の魅力を伝えられ、次のアクション（地場産品を購入するなど）に動いてもらえるのか、リサーチ・分析を行う。次に、届けるべき地域情報を、持続性を担保しながらどのように収集していきけるのか検討を行う。また、収集した情報をどのように発信していくことが有効な方法となるのか検討を行う。

活動②：人材の配置した積極的な情報収集・発信

活動①の社会実験のプロセスの中で、コミュニケーション（情報収集・発信）の手法を考え、実践していくための人材を配置する

活動③：人材育成の方法の分析・開発

活動①、活動②の活動プロセスを追いかけ、分析し、地域内のネットワークを構築するために必要な要素とノウハウを抽出する。また、地域の中で中間支援的なポジションのコーディネーターを育成していくための方法論を見出すべく、地域にネットワークを持たない人材(UI ターン人材)を配置し、本プロジェクトを実施し分析を行いまとめる。

(直近1年間の進捗など) 平成22年度

- 会員制度 RIVER の NPO 法人化・事業展開の基盤づくり
- 地域ビジネスの次世代を担う人材育成のしくみづくり社会実験
 - 内閣府・地域社会雇用創造事業を活用し、地域密着型インターンシップを実施
 - 経済産業省・むらづくりに燃える若者創出事業を活用し、いなかビジネス起業家支援を実施

● 活動の成果

・全体・平成21年度

(活動の成果、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

目標① : 地域内の地域情報を収集し、発信できる最適なコミュニケーション手法を開発する。

【達成状況】

今回の実験的な取り組みを通じて、地域内へのコミュニケーション手法としては、①イベント ②展示 ③広報誌づくり を、地域外に対しては、①人のつながりを活用した物産販売 ②Web 等のデジタルツールの活用 を開発することができた。

今後は、これらの手法の効果を挙げていくために、手法を活用しながらブラッシュアップしていくことが必要であると考えている。

目標② : 地域情報の収集・発信を通じて、地域内のネットワークを再構築する。また、そのつながりから、次のアクション(地場産品を購入するなど)が起こり始めるところまでを目指す。

【達成状況】

既存のネットワークを顕在化させたり、ネットワークが希薄な層を明らかにするところまではできた。今後、今回開発したコミュニケーション手法を実施していく中で、ネットワークを再構築していけるし、次のアクションを起こすようにもしていけると考えている。

目標③ : 地域内のコーディネーターの人材の育成方法を分析・開発する。

【達成状況】

コーディネーター育成をしていく上でのポイントを分析し、整理することができたと思う。人材育成の方法としてはある程度開発することができたので、今回の取り組みを参考にしながら、今後は、インターンシップなどを積極的に受け入れ経験を重ねながら、その方法論を確立していきたい。

・直近1年間の成果など

(活動の状況、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

- 昨年度の取り組みの成果を活かし、地域で次の世代を育てていくという仕組みをつくる取り組みをスタートすることができた。インターンシップを本格的に展開させることで、地域に若い人材が入りやすくなり、地域や組織内に刺激をもたらし、活性化につながっている。
- 受け入れ側にとっても、外の人を受け入れるということのノウハウが蓄積され始めており、地域の中に仕組みをつくっていけそうである。
- さらに、1ヶ月間地域に滞在する経験を持った若者約60名が全国各地に散らばっており、新しいネットワークが作られ始めている。このネットワークから次の展開が生まれる予感を感じる。

● 今後の課題及び展望

・課題 (活動を通して発見された課題等を記入)

○ 定住を希望する若者も出始めているが、「住む場所」がないという問題が見えてきている。空き家はあるものの、信頼関係がないところから、それを貸してもらえないことが多いことが見えてきた。

・展望 (今後の取組みや検討について記入)

○ 取り組みを行って、情報発信さえできれば、田舎にも人は来てもらえるということがわかってきたので今後は、情報発信の強化と、受け皿の確保に力を入れていきたい。

● その他 (自由記述)